



The Sky Story

空のかなたの
願い星

北加 チヤ

このお話を、私にいつも元気を与えてくれる
友人 Iさんと、その3人の子供たちに捧げます

きっとこのお話の、一番目の読者になるであろう
お話を書くことの喜びと、楽しさを思い出させてくれた
K・Tさんに、感謝をこめて

2011年8月24日 北加 チャ

空のとてもとても高い所。『空のてっぺん』と呼ばれるところに、そのお城がありました。

キラキラ光る赤いとんがり屋根は、虹から作った赤色ペンキが塗ってあり、それが大きいもの、小さいもの、細長いもの、ずんぐりしたもの全部合わせて7つありました。真っ白な壁は、雲でできているのにとっても硬くて頑丈です。丸い窓にはステンドグラスがはめ込まれていて、太陽の光を受けて、色とりどりの絵画を、雲の地面に映していました。

この夢のようなお城に住んでいるのは、願い事の神さまでした。人間の願い事を叶えてあげてくれることを仕事にしています。もちろんひとりで仕事をするのは大変なので、たくさんの天使がお手伝いをしています。

人間の知らないところで、願い事の神さまと天使たちは、いつも頑張って仕事をしていました。

そんな、ある日のことです。

「これは困った。どうしよう」

山のように積まれた紙の束を前に、願い事の神さまは困っていました。それというのも、全く仕事が進まないのです。

この紙の束には、願い事の内容が書かれていました。たくさんの願い事を天使たちが種類ごと、地区ごとに分け、紙に書いてまとめるのです。それを願い事の神さまが読んで、叶えてあげるかあげないか決めるのですが、願い事が多すぎて仕事が追いつかず、仕事部屋が紙で埋もれそうになっていました。

「本当に困ったなあ」

願い事の神さまは思いました。

人間の願い事は、こうして自分が叶えているけれど、一体誰が神さまの願い事を叶えてくれるのでしょうか？

目の前の紙の山を一瞬で片付けてくれないかしら？ と願ったところで、神さまの

願いを叶えてくれる神さまはいないのです。

「やれやれ、こうしていても片付かないし、続きにとりかかるか」

願い事の神さまは腰かけると、目の前にあった一枚の紙を手に取りました。

「流れ星が見たいですー」

声を出して読み上げた途端、願い事の神さまの頭にピンとひらめくものが有りました。それは、思わず「それだ！」と叫んで飛び上がってしまう程の良いアイデアでした。

「流れ星！ どうして気付かなかったのだろう！ そうだ。流れ星を降らせればいいじゃないか！」

願い事の神さまは、さっそく天使たちを呼び集めると、その素晴らしいアイデアについて話しました。

「こんなにたくさん、次から次と願い事がやってきたら、どんどんたまるばかりでまったく片付かない。そこで、流れ星にわたしの力を乗せて、地上に降らせようと思う。そうだ、流星群を降らせるぞ！」

願い事の神さまの提案に、天使たちは「おおー」と思わず声を上げ、拍手を送りました。みんな大賛成です。なぜなら、大忙しで困っていたのは天使たちも一緒だったのですから。

すぐに、流れ星を降らせる準備が進められました。

ところが、ここで大問題が発生しました。

なんと肝心の流れ星が足りないのです。お城にあった流れ星は、倉庫でほこりをかぶっていたものが、たったの三つしかありませんでした。大急ぎで天使たちが持っていたものをかき集めても、出てきたのは五つ。お城じゅうをくまなく探して、願い事の神さまの机から二つ見つかりましたが、それらを全部合わせても十個です。

流星群を降らせるには、全然足りませんでした。

「誰かが流れ星をとりに行かなきゃだめだ」

「でも、誰が行くんだ？」

願い事の神さまと天使たちは、困りはててしまいました。みんな仕事があるので、流れ星を取りにいけません。行けるとしても二、三人です。それでは流星群を降らせるほど流れ星を集めるのに、とても時間がかかってしまいます。

また、流れ星は『空のかなた』の『大きな星の木』になるのですが、そこはとても遠い場所で、船で行って戻ってくるのに何日もかかります。それに、流れ星を集めるために必要なものがいくつかあって、それらも用意しなければいけません。

みんなは、うーんと首を右に左にひねるしかありませんでした。それはもう、何か良い方法はないかと考えすぎて、眠ってしまう天使が出てしまうほど、みんな困ってしまいました。

その時です。ひとりの天使がハイと元気よく手を上げました。

「どうしたって、わたしたちは流れ星をとりにいけません。そこで、流れ星が見たいと願っている人間たちに、かわりにとってきてもらうというのはどうでしょう？」

「おお！ それはいい！ その人間達の願い事も叶えられるし、名案だ」

願い事の神さまは大急ぎで、人間を招くための準備を始めました。アイデアを出した天使は、その後みんなにほめられて鼻高々でした。

そうして三十人ほどの人間がお城に呼ばれました。みんな十歳前後の子供です。なぜ子供ばかりかということ、大人は流れ星を見たいと強く思わないし、忙しすぎて星を見る余裕がないからです。

集められた子供たちは、美しいお城の内装や、天使の背中についた羽に興味深々でした。好奇心旺盛な子が、天使の鳥に似た羽を引っ張って驚かせたり、元気の良い子が廊下を走って転んだりしましたが、その他はみんな大人しく、お城の広間へと案内されて行きました。

「みなさんに集まってもらったのは、流れ星をとってきてもらうためです」
たくさんの子供たちを前に、案内役に選ばれた天使が、流星群の事を説明しました。

願い事がたまって大変な事。たくさんの願い事を一気に叶えるために流れ星をいっぱい降らせなければいけないこと。そのための流れ星が足りなくて困っている事。

一通り話し終えた時、眼鏡をかけた頭の良さそうな男の子が手を上げました。

「流れ星って、宇宙に浮いたゴミが大気とぶつかって燃えることって、本で読んだよ。それに、流星群と流れ星っていっしょじゃないって。大体、宇宙を飛んでいるのにどうやって取るの？ 全然科学的じゃないよ」

『科学的』という言葉に、天使はちょっぴりムツとしましたが、顔には出しませんでした。大きな科学の力は空を汚し、魔法の力を削るので、天使は好きではないのです。

「大丈夫。流れ星は『空のかなた』の『大きな星の木』になる木の実みたいなものです。ちょうど、野球ボールくらいの大きさですね。それに、科学は関係ありません。これは夢ですから、何も心配はいらないんですよ」

天使が夢だと言うと、眼鏡の男の子は納得したようで、それ以上質問してきませんでした。

天使は、夢とはなんと便利なのだろうと、心の中で夢の神さまに感謝しました。人間を『空のてっぺん』に連れて来るための手続きをしてくれたのも、夢の神さまでした。

人間には魔法の事や、神さまや天使たちが暮らす世界の事を秘密にしなければいけません。そのため、全部夢だと思いこませているのです。

「流れ星をとりに行く前に、用意するものがあります。火傷しないように手につける『風船の手袋』と、集めた流れ星を入れる『願い笹のカゴ』、そして流れ星の殻を取るのに使う『カニ座のハサミ』です。まずは、『風船の手袋』の材料をとりに行きましょう」

案内役の天使と子供たちは、お城から少し離れた雲の原っぱにやってきました。一面が真っ白でふかふかの雲。地面が、ぼよんぼよんとトランポリンみたいに弾むので、子供たちはみんな飛び跳ねて遊びました。

「この原っぱには、よく割れた風船が落ちてくるのです。それを集めて『風船の手袋』を作ります」

天使はそういと、しおれたゴム風船を子供たちに見せました。色は赤です。そしてみんなが注目している中、天使はゴム風船に魔法をかけました。

キラキラと光が舞ったかと思うと、しおれたゴム風船が一瞬で赤いゴム手袋に変わりました。

子供たちは「わあ」と驚きの声を上げると、一斉にゴム風船を探しに駆けて行きました。みんな自分の好きな色のものを探します。

すぐに見つけた何人かが天使の所へ戻って行く中で、一人の女の子がゴム風船にくくりつけられた手紙を見つけました。

「この手紙を見つけた人へ。お友達になってくださいー」

手紙は雨にぬれたのか、所々読みにくい部分もありましたが、書いた人が十歳の女の子で、子供のあまりいない島で暮らしているということは分かりました。

手紙を拾った女の子は、その子の友達になってもいいなと思ったので、その手紙をポケットにしまいました。そして家に帰ったら返事を書こうと心に決めました。

みんなが自分用の『風船の手袋』を手に入れると、天使はまた別の場所に子供たちを連れて行きました。

そこは雲の切れはしにある森。生えているのは背の高い笹です。その葉の下には色とりどりの短冊がぶら下がっていて、ゆらゆらと風で揺れていました。

『願い笹』は人間達が願い事をする、それと同じ願い事の書かれた短冊を实らせる特殊な笹です。この短冊は、天使たちが集めて書類にまとめ、願い事の神さまに届けられます。今は大忙しで願い事がいっぱいですから、集められていない短冊がたくさん笹にぶら下がったままになっていました。

「はじめにこの辺りにある笹の短冊を集めます。高いところは危ないので、わたしが集めます。みなさんは手の届くところの短冊を集めて、この箱に入れてください」

そして天使は、短冊を破かないように注意する事も言い添えました。人の想いが詰まった願い事は大事にしなければいけません。みんな慎重に、短冊を笹から取って集めました。

「え？ この願い事……」

一人の男の子が、短冊の願い事を見て、びっくりして手を止めました。

「サッカーせんしゅに、なりたいです」と書かれた短冊。それは男の子が七夕の時に書いて、笹には下げずに捨てた短冊でした。字も確かに、男の子の字です。

サッカーが下手っぴで、いつも補欠だった男の子は、自分の願い事がチームメイトに読まれて、馬鹿にされるのが嫌だったのです。だから「サッカーがもっと、じょうずになりたいです」と書き直して、笹にぶら下げました。

そのことを男の子が説明すると、天使は短冊の表と裏をじっくり見てから、

「想いの詰まった願い事は、たまに意思を持つ事があります。きっとこの願い事は、捨ててほしくなかったのです。ですから、願い笹についていたのでしょう。将来の夢とはとても素敵な願い事です。簡単に捨てないで、大事にしてください」

と言いました。

男の子はこくりと頷くと、短冊を箱に入れました。その時こっそり心の中で「どうか叶いますように」とお願いしました。

天使はやさしく微笑むと、男の子の日焼けした顔を見ました。頑張っているサッカークラブの練習をしている子供に、夢をあきらめずに頑張ってもらいたいと、あの短冊の裏には書かれていました。

「お母さんの願い事も叶うといいですね」

天使は誰にも聞こえない声で、つぶやきました。

ある程度短冊を集め終わると、天使は筐の中から頑丈なものを数本選んで切り倒しました。筐がたくさん集まって、小さな山が出来上がりました。

天使が筐の小山に魔法をかけると、またキラキラの光が舞って、大きなカゴに変わりました。それは蓋がついていて、ちょうど小学校のバスケットボールを入れるカゴと、同じくらいの大きさでした。

天使はそのカゴを、全部で五つ作りました。

「それでは、いよいよ出発ですが……その前に、みなさんお腹が空いたでしょう？まずは腹ごしらえしましょう。長旅になるので、お弁当とおやつも用意しますよ」

天使に言われて、みんなはお腹が空いている事に気が付きました。風船を探したり短冊を集めたりするのに走り回ったので、お腹も空いているし喉もカラカラです。

「でも、夢なのに、お腹が空くのはおかしいなあ」

眼鏡の男の子は不思議に思いましたが、

「それでは、『雲のレストラン』に案内します」

と天使が言ったので、それ以上深く考えませんでした。

『雲のレストラン』は、おまんじゅうのような白くて丸いドーム型の建物でした。丸い窓にはもちろん、ステンドグラスがはめこまれています。

入口の扉が開いていて、そこから美味しそうなにおいが漂ってきました。そのにおいをかいだら、お腹が空いていた子供たちは、すぐに口の中がつぶでいっぱいになりました。

レストランの中には、案内役の天使とは別の天使がいました。ぽっちゃりした体に白いエプロンを身につけていて、コックさんの長い帽子をかぶっていました。そう、この天使は雲のレストランのシェフなのです。

「みなさん食べたい物を思い浮かべて下さい。そうしてこの魔法のハンドルを時計回りに十回まわすと、あら不思議！ もくもくの白い雲から、こうして美味しい食べ物ができるのです」

そう言って、シェフは次から次と美味しい料理を作り出しました。子供たちは大喜びで、出来た料理を食べました。

ハンバーグに、カレーライス、スパゲッティにピザ。やきそばにお好み焼きと、ラーメンに餃子。そして肉汁したたるサーロインステーキ！

デザートにはいちごパフェにプリン、ショートケーキやアイスクリームが出てきました。もちろん飲み物はジュース。

どの料理も驚くほど美味しいので、みんなついつい食べ過ぎて、お腹がパンパンになってしまいました。

「ああ、なんて素敵なところだろう。こんなごちそうを毎日食べられるなら、ボク、天使になってもいいな」

食いしん坊の男の子が言いました。この男の子は、他のみんなの二倍料理を食べています。その分お腹もふくれて、太った体がより大きく見えました。

「願い事の神さまに願ったらいいさ！ 今は天使が足りなくて困っているから、きっと叶えてくれるよ」

シェフがにこにこしながら言うと、男の子は「やったー」とバンザイしました。天使になれば勉強する事もないし、苦手なかけっこだってしなくていい。だって羽があるんだから、飛べばいいんだもの。毎日たくさんごちそうが食べられるし、良い事ばかり。食いしん坊の男の子は大喜びでした。

「けれど、天使になれば、もう両親や学校の友達には会えなくなりますよ。そして、君がいた事も忘れられてしまいます」

案内役の天使がそういうと、男の子は真青になりました。

パパやママに会えなくなるのは嫌です。どんなに美味しい料理が食べられても、それを一緒に食べてくれる人がいなければちっとも美味しくありません。男の子は一人で食べる料理の味を――それがとっても味気ないということを一嫌というほど知っていたのです。

食いしん坊の男の子は首をぶんぶん横に振りながら「ボク人間のままでいい」と言いました。その顔があまりに必死だったので、シェフと案内役の天使は顔を見合わせ、

「天使の暮らして、そんなに悪くないのに」
と言って笑いました。

出発

さて、いよいよ出発です。子供たちはみんな、背中にリュックサックを背負って、水筒をぶら下げています。もちろんリュックサックの中に入っているのは、『風船の手袋』に、お弁当とお菓子。なんだか遠足みたいです。

ここで案内役の天使の他に、船の船長と乗組員が加わる事になりました。天使の用意した船は、とても大きな円盤で、映画や漫画に出てくるUFOみたいだと子供たちは思いました。銀色の服を着た天使たちが宇宙人に見えます。

「さあ、みなさん順番に乗りこんで下さい。『空の海』に出発です」

全員が船に乗り込んで席に着くと、天使は「シートベルトを締めてください」と言いました。

入口のドアが閉まって、ゆっくりと船が浮き上がります。ふわふわとクラゲが海を漂うような動きで、船は上へ上へとのぼって行きました。

窓から下をのぞくと、見送りをしている天使たちがだんだん小さくなっていきます。お城も遠くなって、ついに見えなくなりました。

すると急に、何かに天井がぶつかったのかドシーンという音がして船が揺れました。子供たちはびっくりして座席にしがみつきました。

何が起きているのか確認する前に、ぐるんと船が一回転しました。まるで遊園地のアトラクションに乗ったみたいで、子供たちは「キャー」と声を上げました。

「無事、『空の海』に入りました。ここからはそんなに揺れないので、シートベルトを外しても大丈夫です。さあ、みなさん。窓から外を眺めてみてください」

船内アナウンスが流れて、子供たちは安心しました。どうやらさっきの揺れは、事故などではないようです。

子供たちはほっと息をつくると、言われた通り外の景色を見ました。そして、その美しさに驚きました。

キラキラ光る星の海。それがどこまでも、どこまでも広がっています。明るい街灯に隠れて、息をひそめるように光る星しか見た事のなかった子供たちは、はじめて見

る景色に感動しました。

こんな世界があったなんて知りません。教科書に載っている宇宙の写真の何倍、何千倍も美しい所だと、子供たちは思いました。

みんながぼんやりと、外の景色に夢中になっていると、

「あれは、何？」

子供の一人が、星の海を指差しました。

見ると、何か黒いものが、星の海を飛んでいます。それはゆっくり船に近付いてきました。

「魔女だ！」

誰かが叫ぶと、他のみんなも騒ぎ出しました。

そこにいたのは、ほうきに乗った魔女。真っ黒い服と帽子を身に付けた、とんがり鼻のおばあさんでした。

おばあさんは船の窓まで近づいてくると、子供たちに向かって手を振りました。にこにこ笑っています。

おばあさんの顔を見た子供たちは、ぞぞっとしました。なぜって、おばあさんが笑うとしわだらけの顔がさらにしわくちゃになって、開いた口にほとんど歯がないのが、見えるのですから。髪も真っ白だし、どう見ても悪い魔女にしか見えません。

けれど、天使たちはおばあさんを見ても平気な様子で、おばあさんが手振りで入口のドアを開けてくれというと、あっさり開けて中に招き入れました。

「やあ、これは『空の掃除人』ではありませんか。ごくろうさまです」

乗組員の天使が手を差し出すと、おばあさんはそれを手に取って握手しました。船長や案内役の天使とも、握手をします。

子供たちは、天使たちの後ろにかくれて頭を下げました。けれど何人かの子供は、怖くて身動きする事もできませんでした。

「こちらのおばあさんは『空の掃除人』です。『空の海』を掃除するのが仕事なんですよ」

天使がそう説明すると、おっかなびっくりおばあさんを見ていた子供たちも、少しずつ前に出てきました。子供たちを見てうれしそうに笑ったおばあさんの顔は、やっぱり不気味でしたが、白くにごった眼はよく見ると優しくそうでした。

「人間の子供を見るなんて、何百年ぶりかねえ。ひっひ……」

おばあさんはそう言うと、案内役の天使を手招きして内緒の話をしました。

天使は「ああ、それは大変ですね」と言うと、にっこり笑って、子供たちの方を見ました。おばあさんを見ておびえている子供もいるけれど、好奇心いっぱいの目で見ている子も何人かいます。

「わたしは良いと思いますよ。どうぞ、子供たちに聞いてみてください」

天使はそう言うと、おばあさんにウィンクしました。おばあさんはひっひと笑うと、子供たちに、

「どうだい、お前さんたちの中で、魔法のほうきを使ってみたい子はいないかい？ ばばも年じゃから、ひとりでこの広い海を掃除するのは大変なのじゃ。誰か手伝ってくれないかい？」

と尋ねました。

すると、ほとんどの子供が首を横に振る中で、五人の子供が手を上げて「手伝う！」と言いました。女の子が二人に、男の子が三人です。

その子たちは元気と勇気、そして好奇心がいっぱいの子供たちでした。

「そうかい。手伝ってくれるかい。じゃあ、ついておいで」

そうしてまた、おばあさんはまたひっひと笑うと、その子たちを連れて『空の海』に行きました。

『空の海』に立った子供たちは驚きました。

海というから、水があるのだろうと思っていたのに、そこにあったのは透明な氷でできた床です。そう、船はこの上をアイスホッケーのパックのように、滑りながら走っていたのでした。

「この『空の海』が汚れると、夜空だけじゃなく昼間の空もにごってしまう。空にごるとくもりの日ばかりが続いて、みんなの心も暗くなってしまうんじゃ」

と、おばあさんは言いました。

毎日がくもり空だったらどんなだろう？ とても美しいと思った星空が見られなくなったらどう思うだろう？ 子供たちは考えてみました。

するとそれはとても寂しくて、悲しい事のように思えました。そんなのは嫌です。

だから子供たちは、魔法のほうきの使い方を説明するおばあさんの言葉を、熱心に聞きました。

「こいつは確かにほうきじゃが、使い方は大きな筆みたいなものじゃ。このバケツに魔法の絵の具が入っているから、それをつけて『きれいになあれ』と願いを込めながら、ゆっくりとすべらせるんじゃよ」

子供たちが言われた通りほうきをすべらせると、ほうきの走ったあとがキラキラと光りました。天使が見せた魔法の光と一緒にです。光はやがて消え、後にはピカピカの宝石みたいに光る足場ができていました。

それはとてもきれいで透き通っていました。足の下に何も無いような気さえます。

子供たちは、魔法が使えた事に大喜びでした。おばあさんにもここにこと嬉しそうなので、みんなははりきってほうきをすべらせました。

子供たちがほうきをすべらせる姿は、大きな筆で星空を描いているようです。

キラキラ光る星の中には、誰かが暮らしている星もあるのかしら？ どこかの誰かが空を見上げて、きれいだなあと思ってくれるかな？

そんなことを考えると、子供たちはまるで世界を描いているような気分になります。

した。

神さまになったみたい。神さまってこんな風に見ているのかな？

そうしてあっという間に、その日掃除する範囲がきれいになりました。

「みんな、ありがとうよ。おかげでこのあたりはすっかりきれいになった。ひっひっひ。どうじゃ？ 楽しかったかい？」

おばあさんが尋ねると、一人の女の子が答えました。

「少し疲れたけど、楽しかったよ！ 今まで、お掃除嫌いだったけど、好きになりそう。だって、キラキラきれいなものを見ると楽しくなるもん。お掃除ってみんなが気持ち良くなるものなんだね」

そうして女の子がにっこり笑うと、おばあさんは「そうかい」と満足そうに頷きました。

おばあさんとお別れして、船は再び出発しました。

カニ座まではまだ距離があるので、天使は子供たちを休ませるベッドを用意しました。そのベッドは白くてふわふわの雲でできていて、子供たちは横になるとすぐに眠くなりました。

ベッドが気持ち良かったせいもありますが、みんなたくさん動いて疲れてしまったのです。「夢の中でまた眠るなんておかしいぞ」と、またまた眼鏡の男の子は変に思いましたが、襲ってくる眠気には勝てず、結局そのまま眠ってしまいました。

天使たちは子供たちの寝顔を満足そうに眺めると、自分たちも雲のベッドに入りました。これから先は自動運転でカニ座を目指します。

船長が照明を消すと、天使たちは「おやすみなさい」を言いあって眠りにつきました。

そうしてみんなが眠りにつくと、夢の神さまがみんなのために、素敵な夢を見せてくれました。

ジリリリリリリリ

カニ座に着くと同時に、目覚まし時計がけたたましい音を鳴らしました。そのうるささに、みんな一斉に飛び起きます。

船長は慌てて目覚まし時計を止め、乗組員は、びっくりしてベッドから落ちてしまった子供を助け起しました。

みんなは「おはよう」とあいさつをかわすと、天使が用意した洗面器の水で顔を洗って、雲でできたふかふかのタオルで拭きました。

雲のふかふかはクセになります。あまりに気持ち良すぎて、すっかり目が覚めたはずなのに、また眠くなってしまいます……

「わあ！　すごいよ！」

ちょうど誰かが叫んだので、眠ってしまいそうになった子たちはパッチリと目が覚めました。窓の外をのぞいた子が、しきりに窓の外を指差します。

子供たちは何がすごいのかと思って、窓の外を見ました。

「わあ。きれい……」

海です。砂浜があって、波が打ち寄せては返す、美しい海がそこには有りました。

「あ！　カニだ！」

「本当だ！　カニがいっぱいいる」

浜辺にはたくさんのカニがいました。それもとても大きなカニです。子供たちの背丈の半分くらいはあります。赤とオレンジの混じった甲羅は堅そうで、二本のハサミは何でも切ってしまいそうな鋭さがありました。

「あのカニのハサミを使うんですよ」

天使がそういうと、一人の女の子が尋ねました。

「カニさんのハサミを、取っちゃうの？　それって、痛くないの？」

「取ったばかりの時は痛いかもしれませんが、すぐに魔法で治るから大丈夫ですよ」

天使はそう言いましたが、女の子はカニのハサミをとるのは可哀そうだと思います。誰だって痛いのは嫌です。

わざわざ取らなくてもいい方法はないかと女の子が考えていると、あの眼鏡の男の子が言いました。

「カニも連れて行けばいいんじゃないかな？ 事情を話して、流れ星を取るのを手伝ってもらったら？ カニが話せるなんて科学的じゃないけど、夢なんだからできるかも」

「それがいいわ！」

なんとも良いアイデアに、女の子は飛び上がって喜びました。眼鏡の男の子に抱きついて「ありがとう」と言うと、カニ達の所へ走って行こうとしました。

「え！ ちょっと待って！ 僕も行くよ」

眼鏡の男の子が照れ臭そうに言うと、女の子だけじゃなく他の子たちも「行く」と言い出しました。

そして子供たちは、天使の言う事も聞かずに飛び出して行きました。

カニたちは砂浜で日向ぼっこをしているようでした。子供たちが近づいて行くと、一番大きくて年寄りのカニがハサミを上げてあいさつしました。

子供たちはぺこりとお辞儀すると、代表として眼鏡の男の子がカニに話しかけました。少し話して、年寄りのカニがここの長老だと分かりました。

「願い事の為に、流れ星を取りに行く？　そういうことなら、このハサミを持っていくといい」

長老が当然のように自分のハサミを切り落そうとすると、子供たちはあわててそれを止めました。

「いえ、カニさんだってハサミを取ったら痛いでしょう？　だから僕たちと一緒に来てほしいんです」

「ええ？　わしらを『空のかなた』に連れて行くだって？！　今まで誰もそんなことを言った者はおらん。流れ星の殻をむくにはわしらの頑丈なハサミが必要じゃ。だから、それを与えるのは、ワシらの仕事なんじゃ。とったばかりは少し痛いけど、魔法ですぐに元通りになる。だから、気にする必要はないんじゃよ」

長老はそう言いましたが、子供たちは首を横に振りました。

「誰かが痛い思いをするのに、それを下さって言うのはおかしいと思います。それに、カニさんが痛い思いをするのが当たり前なのも、変です。カニさんには、痛い思いをするんじゃない仕事だって、あると思います」

女の子が言いました。その子は子供たちの中であまり目立たない子でしたが、人の痛みをよく知っていました。だからとっても優しくかったです。

「うぬう。別の仕事か……じゃが、わしらはこの砂浜から出た事もない。『空のかなた』に行くなんて無理じゃ」

長老がそういうと、周りにいた若いカニたちがハサミを勢いよく上げました。

「長老さま！　僕たち、この子たちと一緒に『空のかなた』に行きます！　外の世界がどうなってるのか、この眼で見たいんです」

「新しい仕事を探してきます！」

「流れ星がなっている所を見たいんです」

「お願いします。長老様！」

若いカニたちが騒ぎ出すと、長老は「やれやれ」とつぶやいて、子供たちの方に向き直りました。

「わかった、わかった。人間のみなさん、どうかこの若い連中と一緒に連れて行ってください」

長老はハサミを差し出しました。どうやら握手を求めているようでしたが、そんな鋭いハサミと握手したら手がもげてしまいます。子供たちが手を出さない事に気が付いた長老は、「こりゃ失礼」と言って、ハサミではない足を出しました。これなら握っても大丈夫。子供たちの代表として、あのやさしい女の子が長老と握手を交わしました。

その様子を天使たちは、物陰から見守っていました。子供たちの優しさが嬉しいと思いました。そして、カニからハサミを貰うのが当たり前だと思っていた自分たちのことを、深く反省しました。

切ったら痛いのは誰でも一緒です。いくら魔法ですぐに元通りになるからといって、誰かを傷つける事を当然とってはいけなかったのです。天使たちはみんなの前に出ていくと、これまでのことをカニたちに謝りました。

するとカニたちは、笑って天使たちを許してくれました。カニの硬い足と天使の柔らかな手で握手をすると、お互いの胸の奥の方が温かくなる気がしました。

それはどこか、願い事が叶った時の喜びに似ていました。

「それでは、出発進行！」

船長の掛け声とともに、船が浮き上がりました。

みんなシートベルトを付けています。カニたちは、自分でシートベルトをつけることが出来なかったので、子供たちが手伝ってあげました。

船はまた、ふわふわクラゲのように上へあがって行くと、天井が何かにぶつかってぐるんと一回転しました。もう二回目のことなので、子供たちは驚きません。

けれど、カニたちにとってははじめての体験だったので、みんなびっくりして泡をふいてしまいました。子供たちはカニたちのシートベルトをはずすと、硬い背中をさすってやりました。

『空の海』の美しさは、カニたちを圧倒させました。「ありがとう」と言うカニたちに、子供たちは「どういたしまして」と答えました。

「オレ、いままで、世界で一番カニ座の海がきれいだと思ってたんだ。でも違った。世界にはもっともっと、きれいなものがいっぱいあるんだな」

一匹のカニがそう言うと、子供の一人が「そうだね」と答えました。そして『空の海』を眺めて、不思議な事に気がつきました。

はじめて『空の海』を見た時より、今の方が美しいと思うのはどうしてでしょう？
星の光が、前よりもっと輝いて見えるのは気のせいかしら？

子供はそのことを船長に尋ねましたが、船長は優しく笑うだけで答えてはくれませんでした。

船はまっすぐに『空のかなた』に向かっていました。『空のかなた』は『空の海』の中でもずっとずっと遠くで、天使たちの船でも普通なら何日もかかる場所でした。

天使たちは船の旅に、子供たちがすぐに飽きてしまうのではないかと心配していましたが、そんなことはありませんでした。

子供たちは遊びの天才でした。それにカニたちも仲間に加わったので、また別の遊び

ができます。『空のかなた』に着くまでの間、子供たちは疲れすぎて雲のベッドで休まなければならないほど、遊びまわりました。

それに予想以上に早く、『空のかなた』に到着したので、子供たちは飽きる余裕なんてありませんでした。実は、時間の神さまがこっそり手助けしてくれていて、なんとカニ座から一日で『空のかなた』に着いてしまったのです。

もちろん、時間の神さまが手伝ってくれたのには理由がありました。あまり長い時間こちらの世界にいると、子供たちに夢だと思わせる事が出来なくなると、夢の神さまから頼まれたのです。

『大きな星のなる木』

「さあ、『大きな星のなる木』に到着ですよ。みなさん、準備して下さい」

案内役の天使が声をかけると、子供たちはハイと元気よく返事をしました。カニたちもハサミをチョキンチョキンと鳴らします。

船の扉が開くと、キラキラとまばゆい光が目飛び込んできました。風に木の葉が揺れる音が聞こえます。森の少しむっとした土のにおいもしましたが、そこは森の中ではなく木の中でした。

大きな大きな木の中。四方を枝に囲まれ、天井も葉っぱと枝に覆われています。ひらひらと落ちてきた葉っぱは緑色で、星の形をしていました。

一か所だけ開けている所があって、船はそこから中に入って来たのでしょうか。足場の土は、腐葉土でできていて歩くとふわふわしました。

キラキラの光は全てが星で、それらはみんなこの大きな木になっています。『空のかなた』の『大きな星のなる木』とは、その名前の通りのとても大きな木でした。

「みなさん見えますか？ あの光がみんな、流れ星です」

案内役の天使が光を指差して言うと、その光の方から何かがたくさん飛んできました。「おや？」と天使が眉をあげます。

「これはこれは、みなさんでお出迎えとは、一体どうしたんですか？」

案内役の天使が飛んできたものに尋ねました。それは、背中に蝶の羽を付けていて、手のひらに乗るくらいの大きさをしていました。ふわふわ飛ぶ姿は、おとぎ話に出てくる妖精の様だと子供たちは思いました。

「みなさん、紹介します。こちらは『空のかなた』の天使の方々です。星の神さまのお手伝いをしているんですよ」

「みなさん、ようこそいらっしゃいました。まあまあ、『空のてっぺん』の天使さんと、人間の子供さんと、カニ座のカニさんですか。こんなに色々な方がいっぺんにやってくるなんて珍しいですね」

『空のかなた』の天使たちはほほ笑みました。子供たちはぺこりと頭を下げ、カニたちはハサミをあげてあいさつしました。

「流星群を降らせるそうですね。たくさん集まるのは大変でしょう？ わたしたちも手伝いますよ」

『空のかなた』の天使のひとりがそう言うと、案内役の天使がびっくりしていいました。

「どうしたっていうんですか？ あなた方は……いつもは手伝ったりしないでしょう？」

「そりゃあ、今回は特別ですよ。何でも、『空の掃除人』の手伝いをしてくれた子がいるそうですね？ それで『空の海』がとても綺麗になったと、星の神さまが喜んでいたんです。ですから、そのお礼をしたいんですよ」

おばあさんのお手伝いをした子供たちは、それを聞いて嬉しくなりました。おばあさんも喜んでくれたけれど、星の神さまや『空のかなた』の天使も喜んでくれているだなんて、掃除したかいがあります。

案内役の天使は「そういうことなら」と朗らかに笑うと、『空のかなた』の天使たちに、流れ星を集めるのを手伝ってくれるように頼みました。

「それでは、流れ星をとりましょう！ でも、全てをとって良いわけではないんですよ。よく熟したものでないと、願いの力を乗せられる流れ星にはならないのです。その見分け方を教えますね」

『空のかなた』の天使はそういうと、魔法を使って虹の階段と足場を作りました。これを使えば、遠くにある星に手が届きます。

天使たちが羽を使って上がっていくのに続いて、羽を持っていない子供たちは、横歩きで上りにくそうにしているカニたちを手伝いながら、虹の階段を一段ずつ上って、流れ星の下まで行きました。

近づいて見ると、流れ星はまんまるではなくて、たくさんの突起がついていました。大きさもまばらで、大きいものや小さいものなど色々あります。

「よく熟した星は音がなるのですぐに分かります。ただしとても熱いので、顔を近づけすぎないようにしてください」

「実際に聞いてみたほうが分かりやすいですね」

案内役の天使は両手に『風船の手袋』をつけると、星をもぎ取りました。

そしてそれを同じように『風船の手袋』をつけた船長に手渡すと、子供たちには流れ星に耳を近づけてみるよう言いました。

子供たちはそっと流れ星に耳を近づけてみました。すると、確かにブスブスと火が燻るような音がします。それは線香花火に似ていました。火花を散らす前の、パンパンに膨らんだ火の球みたいです。

船長は子供たちが一通り流れ星を見終わったのを確認すると、それを一匹のカニに手渡しました。カニは流れ星を受け取ると、そのハサミで殻を破りました。じゅうっとフライパンに卵を落とした時のような音がしましたが、頑丈なカニのハサミはびくともしませんでした。

殻をすっかり取り除くと、中から宝石のように輝く丸い球が出てきました。

「これが、流れ星です。もう素手で触っても大丈夫ですよ」

『空のかなた』の天使は、パンパンと流れ星を叩いて見せました。

子供たちは、そおっと流れ星を手にとってみました。それは確かに熱くなく、人間

の体温と同じくらいの温かさでした。よく目を凝らしてみると、球の中心に火があって燃えています。ろうそくの炎みたいです。

「流星群を降らせるには、少なくとも三千個の流れ星が必要です。一人あたり百個を目標に、カニさんと子供たち二人のグループを作って集めてください。みなさんくれぐれも、足場から落ちないように気を付けてくださいね。わたしたちと違って羽がありませんから、落ちたら大けがをします」

案内役の天使がそう言うと、子供たちはハイと元気よく返事をしました。

天使の合図とともに、子供とカニのグループは散って行きました。みんな慣れないうちは、流れ星をもぐ仕草がぎこちなくて危険でしたが、だんだんとコツをつかんだのか上手になっていきました。

「流れ星がなってる姿が、こんなだって知らなかったよ」

殻をむきながらカニが言うと、グループの男の子が頷きました。

「ぼくも知らなかった。願い事の神さまがいることも知らなかったけど、流れ星を集めるのがこんなに大変だなんて思わなかった」

「でも……確かに大変だけど、なぜだか、僕は楽しいな」

「ああそれ、私も同じだよ。流れ星を集めるのもそうだけど、こうやって冒険するのって、とっても楽しい」

もう一人一緒のグループの女の子がそう言うと、男の子も「そうだね、楽しい」と言いました。

「……でもこれみんな、夢なんだよね。私、忘れちゃうの嫌だな。とっても楽しかったし、カニさんともせっかく友達になれたのに」

女の子が寂しそうに言うと、カニはしゅんとハサミを下げて言いました。

「僕は、忘れないよ。夢だって、みんな忘れてしまうわけじゃないし……もし忘れてしまっても、僕たちが友達だってことには変わらないよ」

カニがそう言うと、二人と一匹は両手で握手しました。カニは足が多いので、子供の手を二組、四本の足で握りました。

「そうだね。約束」

「うん。約束だよ！」

女の子の目から零れた涙が、カニの足を濡らしました。それは温かくて、なぜかカニは故郷の海水を思い出しました。

カニが二人に言ったことの半分は嘘です。どんなに強く願っても、二人がこの世界のことを忘れてしまうことをカニは知っていました。

夢の神さまの魔法で、あちらに帰って目が覚めたときから、だんだんと記憶が消えていくのです。子供の時は覚えていても、大人になったら、ここで有った事全てを忘れてしまうでしょう。

だからこそカニは、二人の事だけじゃなく、子供たちみんなのことを覚えていようと思いました。

そして将来、自分の子供や孫たちに、子供たちのことを話してあげるのです。そうすれば、ずっとずっと、みんなは友達でいられます。

カニはハサミで流れ星の殻をむきながら、そのことを強く心に刻みました。

そうして五つ用意された『願い笹のカゴ』も、二時間もするといっぱいになり、集まった流れ星はなんと五千個を超えていました。

ただ、それと同じだけの量の殻が出たので、それも山になっています。むいた後の殻は、火傷するほど熱くはありませんが、ポカポカと熱を持っていました。ちょうど、こたつと同じくらいの温度くらいです。

「この殻の山は、どうするの？」

子供の一人が尋ねると、『空のかなた』の天使が答えました。

「太陽のたまごを温めるのに使います。これだけたくさんあれば、ずいぶん長い間持ちますね」

「太陽のたまご？」

「そうです。太陽はたまごから生まれるんですよ。何千年、何億年もかけてゆっくりと温められたたまごから生まれて、その殻からたくさんの命のある星が生まれます。あなたたちの生まれた星も、そうしてできたんですよ」

子供たちは想像してみました。

ずっとずっと大昔、太陽のたまごが割れて、その殻から自分たちの星ができた時の事を。でも、たまごがあるということは、それを産んだ鳥もいるのかしら？

不思議に思って尋ねると、『空のかなた』の天使はくすりと笑って「ないしょです」と言いました。子供たちは「えー」と不満の声を上げましたが、仕方ありません。太陽のたまごを産むのは星の神さまですが、その事は人間には秘密なのです。

流れ星も集まり、子供たちに怪我もなかったので、『空のてっぺん』の天使たちは安心しました。後は帰るだけですが、その前にしなければいけないことがあります。

案内役の天使は、子供たちとカニたちにお礼を言いました。

「本当にありがとうございました。私たちからおねがいして、願い事の神さまに、願い事を一つ叶えてもらえるようにします。何がいいか考えておいてください」

すると、一匹のカニがハサミを振りしました。

「もう、願い事は叶いました。外の世界を見たいという願いだけでなく、こんなにたくさん友達ができ、わたしたちはとても満足しています。これ以上何かを望むのは我がままですから、もうお願いする事なんてありません」

カニがそう言うと、女の子の一人も、

「私たちが願い事したら、お仕事また増えちゃうでしょ？ それに、今までできないと思っていたことも、やってみたら自分たちでできたの。だから神さまにお願いする願い事はないよ」

と言いました。

「どうせお願いしたって、これは夢なんだから、目が覚めたらおしまいでしょ？ それじゃあ意味がないし、全然科学的じゃないよ」

眼鏡の男の子がそういうと、案内役の天使は苦笑しました。この子が言う『科学的』という言葉も好きになりそうです。

「それじゃあ、帰りましょうか」

船長が微笑むと、みんなは大きな声で返事をしました。

その日、たくさんの流れ星が地上に降りました。

子供たちは眠っていたので知りません。

一部の、天体を観測している大人が、突然の流星群に驚いて、コーヒーをズボンにこぼしてしまいました。空を見上げる余裕もない、とても忙しい大人達は、流れ星が降った事に気がつきませんでした。

そしてその日から、何かが少しずつ変わり始めました。

ある島に住む女の子には友達ができました。まだ文通だけで会った事はありませんが、写真をもらったので顔は知っています。その子は自分と同じ年の女の子で、風船につけて飛ばした手紙を拾って、返事を書いてくれました。素敵な夢の話をしてくれる、面白い子です。

女の子はその子から来る手紙を、いつも楽しみに待っています。

ある男の子は、毎日サッカーの練習をしています。まだ補欠ですが、監督からドリブルが上手くなったと誉められました。毎日泥だらけで帰ってきても、お母さんは怒りません。それどころか、毎朝お母さんが作ってくれるお弁当のおかずが、一品増えました。

前より格好よくなったと女の子に言われて鏡を見たら、ちょっとだけ背が伸びていました。

食いしん坊だった男の子は、前よりもっと食いしん坊になりました。そのせいでますます太っていくので、ママは心配しましたが、「ママの作る料理が世界で一番美味しい」と言われると怒る事もできません。仕方がないので、ママは美味しく健康に良い料理を作ろうと、料理の勉強をはじめました。

男の子が太りすぎないように、パパと一緒にジョギングをするようになりました。けれど、ダイエットには成功していません。

それでも、前より家族で一緒にいる時間が増えたので、男の子は幸せでした。

ある女の子は掃除が好きになりました。自分専用のほうきを買ってもらって、毎日家の前を掃いています。時々道端に落ちているゴミを拾ってゴミ箱に捨てたり、弟が食べ散らかした後を片付けたりします。それを見た大人が、「偉いね」とほめてくれるので、女の子は掃除がますます好きになりました。

どうして掃除が好きになったのかは分かりませんが、将来は宇宙飛行士になって、宇宙のごみを掃除するのが夢です。

月のクレーターもごしごしこすったらなくなるんじゃないかしら？ と楽しい事を考えながら、女の子は今日もお掃除をしています。

眼鏡をかけた頭のいい男の子は、前より友達が増えました。『科学的じゃない』という口癖はまだ治っていませんが、前よりも理屈っぽくなくなったので、同級生と打ち解けられるようになりました。

小学生が読まないような難しい本を読んで勉強していますが、前と違って魔法や天使が出てくる物語なども読むようになりました。今まで将来の夢は科学者だと言っていたのですが、今は魔法使いもいいなと思っています。

でも魔法使いなんて、『科学的じゃない』ので口に出しては言うことはありません。

『空の掃除人』のおばあさんは、前と同じように『空の海』で魔法のほうきを使って掃除をしています。けれど二つだけ、大きく変わったことがあります。

そのひとつは、助手がひとりーではなく一匹、できたことです。かわいい女の子のカニです。ほうきは持てませんが、カニ専用の魔法のハンドモップを足に付けて滑ると、足が多い分広い範囲を掃除する事ができます。

そしてもうひとつ。おばあさんが笑っても、誰も怖がらなくなりました。

なぜって、子供たちがおばあさんのために、おうし座の角で作った入れ歯をプレゼントしてくれたからです。大好物のせんべいも食べられるようになって、おばあさんは大喜びです。

見た目も少しだけ若返ったので、黒ばかりじゃなくピンクや黄色の服も着るようになりました。お化粧もはじめました。ただ、それが似合っているかどうかは……それを見たカニが泡をふいたとだけお知らせしておきましょう。

おばあさんとカニは時々、流れ星を取りに来た子供たちの話をします。きれいな空を見て、みんなが嬉しい気持ちになればいいねと話しながら、毎日『空の海』を掃除しています。

カニ座では、新しく床屋さんができました。一匹のカニがハサミの使い方について子供たちに相談したところ、髪を切るのがいいと言われたのです。開始そうそう、美容に力を入れているおとめ座の住人たちがやってきて、とても繁盛しています。

また、きれいな砂浜のあるカニ座を、リゾート地にしようと考えているカニもいます。でも資金が足りないので、今は海の家を経営しています。鋭いハサミを使って削ったかき氷に人気が集まって、結構もうかっています。もしかしたら、そう遠くない未来にリゾートホテルができるかもしれません。

もう誰も、カニのハサミをもらおうとはしません。カニたちは新しい仕事を見つけたし、『大きな星の木』で殻むき屋をはじめたカニがいるので、頼めばいいからです。

そしてたくさんのカニたちが、船に乗って外の世界に旅立ちました。その船の船長をしているカニの中には、子供たちと一緒に流れ星を取りにいったカニもいます。いつかその子供たちに会えるといいなと思いながら、カニたちは果てしなく広い『空の海』を旅しています。

高い高い空の上。『空のてっぺん』のお城にいる願い事の神さまは、今日も仕事をしています。

「なんだか、前よりずいぶんと願い事が減ったんじゃないか？」

願い事の神さまがつぶやくと、天使が答えました。

「それだけ、人間たちが幸せだってことですよ。それに、神さまに願う前に何かをしようとする人間が、少しですが増えたようです」

「そうか。だが、願い事がなくなったら、わたしの仕事は無くなってしまうなあ。それは困るぞ？」

願い事の神さまが眉を寄せると、天使は笑って答えました。

「願い事がなくなることなんて、ありませんよ。ほら、新しい仕事がやってきました」

天使が指差した先には、うず高く積まれた紙の山が有りました。

あんなに苦労したのに、またこんなに仕事が！ 一体どうして人間とはこんなにも、願うことが多いのだろう？

願い事の神様はふうと息をはくと、山になった紙束の一番上を手に取りました。そしてそこに書かれた内容を読むと、小さくほほ笑んで、ゆっくりと天使の方を向きましました。

「わたしの願い事を知っているか？」

願い事の神さまが尋ねると、天使は首を傾けました。

「みんなの願いを、叶えることだ」

とても幸せそう願い事の神さまが笑ったので、天使も幸せな気分になりました。

たくさんの願い事がやってくるけれど、願い事の神さまが叶えてあげられる願いはそんなに多くありません。あまり欲張りな願いや、人を不幸にするような願い事は、叶えてあげられないのです。

流星群を降らせた後、やってくる願い事はそんなに減りませんでした。叶えられ

ない願い事は減りました。そのかわり、やさしい願い事が増えました。

誰かの幸せを願うこと。

誰かのために、変わりたいと願うこと。

誰かといっしょにいたいと願うこと。

それらのやさしい願い事は、願い事の神さまや天使たちに、とっても温かくて心地の良い力を与えてくれるのです。

やさしい願い事。

それは、この世界を動かす力のひとつなのです。

長い時間をかけて、太陽のたまごが温められるように、やさしい願い事は、少しずつこの世界を温めています。

たくさんの流れ星が降った日。

その日は願い事の神さまにとって、願い事にちょっと近づいた、とてもうれしい日になりました。

* おしまい *

読者の方へ。

こんにちは。

ここまで読んでくださって、どうもありがとうございます。このお話、いかがでしたでしょうか？ もしよろしければ、感想などいただければ嬉しいです。

また、疑問点やおかしなところ、誤字脱字などありましたら、ご連絡ください。只今執筆修行中、精進させていただきます。

さて。今回の「空のあなたの 願い星」を書こうと思った経緯を、あとがきとして書かせていただきたいと思います。

きっかけはそう、『流れ星のなる木から、それをもぐ』という絵が頭に浮かんだことです。それはずっと前からあって、絵にするか、物語にするか、何かの形でそれを外に出してあげたいと思ったのです。

が、どうやって表現するか思い浮かばず、ずっと放置されていました。おそらく、十年くらい？

それがむくむくと頭の中によみがえってきて、こうしてお話が生まれたのは、やっと『その時』が来たからなのかもしれません。

今年は東日本大震災によって、たくさんの悲しいことや、苦しいことや、悔しいことがありました。けれどそれだけじゃなく、うれしいことや、たくさんのありがとうございました。

本当に自分は恵まれています。幸せとは、大切な人たちが周りにいてくれることです。家族や友人を失わずにすんだこと、住む場所があること、当たり前のように過ごしてきた暮らしに戻ることができたこと。

そして、心配してくれる友人知人から、メールや電話をいただいたこと。

それら全てに、感謝の気持ちでいっぱいです。

本当に今回の経験から様々な感情が生まれました。一生に一度の体験。それがわずかではありますが、私の中の何かを変えたようです。

実はずいぶん長い間、お話を書くことから離れていたのですが、誰かが書いたお話

を読むうちに、また書きたいな思うようになりました。こうして本当に、『誰か』の『何か』の行動が、どこかの別の『誰か』の力になることって、たくさんあると思います。

願い事もそれと同じで。知らないうちに周りに助けられたりして、叶えられて行くものだと思ってしまうのです。

もちろんそれには努力が必要です。怠惰な人のために何かしようとする人は、なかなかいないと思います。

私の願い事は、私の作ったものを読んでもらうこと。そして何かを感じてもらうことです。

ひとつめの願い事は叶いました。ふたつめは、叶いましたでしょうか？

あとがきまで読んでくださって、どうもありがとうございます。

また、違うお話でも会えるといいなと願いながら…

流れ星をさがす 北加チヤ

空のかなたの願い星

<http://p.booklog.jp/book/32716>

著者：北加チャ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/chiya24/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/32716>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/32716>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.